

# 大汶口文化の廟底溝類型系彩陶

西 谷 大

---

はじめに	4 大汶口文化遺跡での出土状況
1 研究の動向	5 出土状況の比較
2 文様と器形の分類	6 大汶口文化の墓制と彩陶
3 仰韶文化遺跡での出土状況	7 小結

---

## 論文要旨

本稿は、大汶口文化諸遺跡で発見された仰韶文化の廟底溝類型系彩陶を取り上げ、この彩陶が、渭河流域、黄河中・下流域から山東地区の大汶口文化に伝播していく様態を追求することによって、廟底溝類型期の各地域間にみられる文化交流の中で、彩陶が具体的にどの様な意味をもつのかを考えようとするものである。

まず、彩陶の各地域・遺跡での出土状況の相異に注目した。河南中部地域および渭河流域の仰韶文化地域において、廟底溝類型系彩陶は、他の土器とともに日常生活の中で使用されたと考えられ、彩陶を墓に副葬するといった習慣は低かったと推測した。次に、山東地区における大汶口文化早期では、廟底溝類型系彩陶が墓で副葬品として発見されることから、彩陶自体が本来有していた食生活用の容器という機能が、明器という機能へ変化したことを指摘し、さらに大汶口文化早期の山東地区では、仰韶文化の廟底溝類型系彩陶の一部の器形と文様を、選択的に取り入れたことを示した。最後に、大墩子・劉林遺跡の墓葬を分析することによって、廟底溝類型系彩陶を副葬するのは、墓域中、副葬品を多く有する裕福な人物の墓であり、彩陶は集団内での権威の象徴として取り扱われた確率が高いと推論した。

いずれにしても大汶口文化早期段階の山東地区の人々は、彩陶を実に主体的に取り入れている。それは、本来日常容器であった彩陶を明器に用途を変化させたこと、また、廟底溝類型系彩陶の中でも最も精緻で、複雑な文様のものを好んで使用したことに如実に現れている。大汶口文化早期の廟底溝類型系彩陶は、渭河流域・河南中部地域から、人の移住に伴って山東地区にもたらされたのではなく、むしろ物の交易を中心とした交流の中で出現したのだろうと思われる。

## はじめに

廟底溝類型は仰韶文化中期に編年されており、河南省陝県廟底溝遺跡を標準遺跡とするが、この類型を特色づける遺物に盆や碗の器面に彩文を施した彩陶がある。黒彩や紅彩による格子目文・方格文・円点文・渦文・条文といった幾何学文を基本とし、それを繰り返して施文することによって文様帯を構成するのを特徴とする。また白色スリップを器面に丁寧<sup>1)</sup>に施した後、彩文を施すものもある。このような廟底溝類型系の彩陶の分布は、西は陝西・甘肅省、南は湖北省、東は山東省から江蘇省と、非常に広範囲であることが知られており、仰韶文化と周辺諸文化との相互関係を論じる場合、仰韶文化が周辺諸文化へ伝播した、あるいは何らかの影響を及ぼした一つの証拠として注目されてきた。

本稿では、黄河下流域の大汶口文化諸遺跡で発見された仰韶文化の廟底溝類型系彩陶を取り上げ、この彩陶が、山東地区の大汶口文化に波及していく様態を追求することによって、廟底溝類型期の渭河流域から黄河中・下流域にかけての地域間にみられた文化交流の内容を解明する基礎作業の一つとしたい(図1)。

## 1 研究の動向

まず仰韶文化の彩陶が、周辺文化との関係でどのように扱われてきたのか略述したい<sup>(1)</sup>。

江蘇省で1950年代に、青蓮崗遺跡が調査され彩陶が発見された際、その彩陶が仰韶文化の彩陶と近似していることから、両者は文化的に何らかの関係があると推測されていた(中国科学院考古研究所編著1962)。しかし、本格的に中国の新石器文化が、仰韶文化とその周辺文化という視点で論じられるようになるのは、西安半坡、廟底溝、北首嶺の諸遺跡の発掘により、中原の仰韶文化の実態が明らかになった1960年代以降のことである。この時期、新石器時代の諸文化の相互関係に対して学界では、黄河中流域の文化が中心となり、周囲の諸文化はその影響下にあったという考え方が大勢を占めていた。量博満は、このような傾向が「中国の研究者は暗黙の内に中国の諸地域に発見される彩陶が、中原の仰韶文化と深いかかわりの結果として了解していた」とし、それが「中原文化の伝播を考える背景にあったようである」と指摘している(量1981)。たとえば張光直は、山東地区の青蓮崗文化を中原仰韶文化からの文化伝播による発生としてとらえ、仰韶文化とのあいだには彩陶、紅陶、石刀といった遺物に類似点があると指摘している(張1980)。安志敏は中原仰韶文化が中国古代文明発祥の地であり、かつ中心であるとしてとらえ、周辺諸文化はその影響のもとにあったと述べている。また、大汶口文化の遺跡から出土する「三角渦紋和円圓点紋等彩陶紋飾」の彩陶は仰韶文化の濃厚な影響から出現したとし

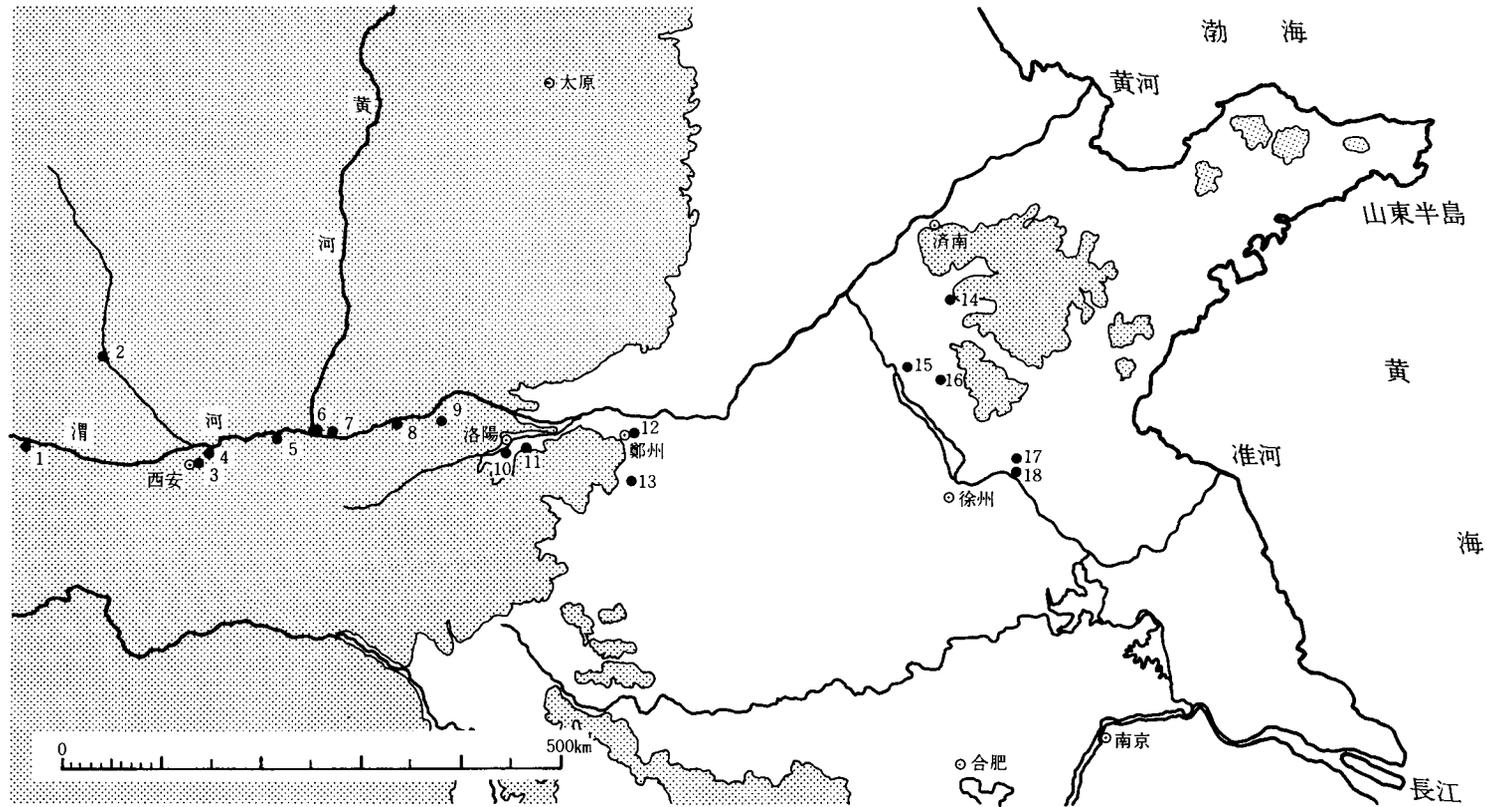


図1 主要遺跡分布図

- 1 北首嶺, 2 下孟村, 3 半坡, 4 姜寨, 5 泉護村, 6 西王村, 7 東庄村, 8 廟底溝, 9 仰韶  
 10 王湾, 11 高崖, 12 大河村, 13 長葛石固, 14 大汶口, 15 王因, 16 野店, 17 劉林, 18 大墩子

ている(安1979)。唯一、蘇秉琦だけが、中原の仰韶文化と大汶口諸文化とは、密接な関係があると認めながらも、「大汶口文化で発見される彩陶は特殊な遺物であり、それに較べて中原地域で発見される豆・鼎は明らかに東の大汶口文化の影響下に発生した遺物で、大汶口諸文化が中原仰韶文化に影響を与えた」と述べている(蘇1965)。

1970年代以降、遺跡の発掘調査の増加、そして<sup>14</sup>Cの年代測定の登場によって、中国各地の遺跡を大枠ではあるが同一の時間枠で対比することが可能になった(夏1977、中国社会科学院考古研究所1983)。その結果、従来のような中原を核とした一方的な文化伝播論は通用しなくなった。

たとえば、1959年に発掘調査され大汶口遺跡は1974年に正式に報告書が刊行されたが、報告者はその中で、廟底溝類型系の彩陶が出土することから、大汶口文化と仰韶文化は密接な関係にあったとしながらも、墓制、石器、土器の構成には相違があり、同一の文化とは認めがたいと指摘している(山東省文物管理处・済南市博物館1974)。

従来、一元論と伝播論で新石器文化を論じていた張光直は、これら中国各地の発掘調査成果を取り入れ自説の修正をおこない、新石器時代の各地域の文化は多元的に発生し相互に影響を与えながら形成されていくと述べるようになる(張光直1989)。このような考え方が広がるとともに、黄河中流以外で発見される彩陶のとらえ方にも変化がみられるようになる。張居中は彩陶は華山周囲が発生の中心としながらも、彩陶だけをもって仰韶文化とは言えず、むしろ彩陶を仰韶文化期の一特徴としてとらえるべきだと指摘した(張居中1986)。崑文明は仰韶文化の遺跡を遺物を単位として詳細に分析し、仰韶文化を再編年しつつ地域設定をおこなった。そして廟底溝期の仰韶文化と山東地区の青蓮崗文化の関係は、彩陶からみると明らかに仰韶文化が青蓮崗の文化に影響を与えているが、廟底溝二期の時期は反対に、むしろ山東地区の大汶口文化が仰韶文化に強烈な影響を与えたとし、地域・時期差による影響の方向性の変化を指摘した(崑1989)。さらに呉汝祚は、大汶口文化の彩陶は廟底溝類型系の彩陶より早く出現したとし、廟底溝類型の仰韶文化が一方的に大汶口文化に影響を与えたのではなく、両者は「平行関係」にあったと述べた(呉1990)。現在は新石器文化の多様性を認識し、各地の文化の内在的な様相をとらえながら相互関係を研究する方向にある。

廟底溝類型系彩陶の出土だけで、その遺跡が仰韶文化の範疇に含まれると決定できないことはもはやいうまでもない。しかし、仰韶文化廟底溝類型期の特徴である彩陶が、仰韶文化の中心地以外の遺跡から出土する場合、直接的にせよ間接的にせよ何らかの形で仰韶文化と周辺諸文化間には、「関係」または「影響」が存在したことになる。その「関係」なり「影響」の具体的な内容を把握することは、仰韶文化と周辺諸文化との関係を把握するだけでなく、ひいては大汶口文化や仰韶文化の性格の一端を考える上でも有意義な作業となってこよう。

そこで本稿では、廟底溝類型の標準遺跡である廟底溝遺跡で出土するタイプの彩陶を、まず

廟底溝類型と規定し、渭河流域から河南中部、そして黄河下流域大汶口文化の諸遺跡での廟底溝類型期の彩陶出土状況を考察する。そして、廟底溝類型系期彩陶の各地域での出土状況を比較することによって、彩陶の用途を推測し、用途による地域性を抽出する作業から始めたい。

## 2 文様と器形の分類

### 文様分類

廟底溝類型系の彩陶の文様については、さまざまな分類がおこなわれてきたが、巖文明が廟底溝遺跡でおこなった文様分類は、単なる文様の形態分類だけでなく、遺構の切り合い関係から土器群の時間的な前後関係を把握しつつ、文様の時間的な変遷をも追求しようとする優れたものである（巖1965）。本稿で廟底溝類型系彩陶と称する彩陶は、廟底溝遺跡で出土した一括彩陶群を指す。以下、文様について略述しておく<sup>(2)</sup>（図2）。

「垂弧文」—弧線文または弧線文と円点・条文を組み合わせたもの。

「凸弧文」—凸形の弧線文両端に円点文を加えたもの。弧線文内側に円点文を加えたものもある。

「対三角文」—三角文を連続させたもの。

「背三角文」—三角文の長辺を背中合わせにする。三角文両端に円点文を加えるものもある。

「豆莢文」—豆莢に似た文様で、楕円形文様の中に円点文を加えたり、条線で結んだものもある。

「花卉文」—細長い楕円形の文様を、円点文を中心に花びら状に配したもの。楕円形の文様内に条線を施すものもある。

「回旋鉤連文」—渦文と円点文を組み合わせ、連続させたもの。

「網格文」—格子目文を円または不定形な枠で囲んだもの。

「窄帯文」—直線文に円点文、または弧線文を加えたもの。

「平行線文」—平行条文。

### 器形分類

中国新石器時代の土器は、種類も多くその名称も多岐にわたるため、報告者によっても土器の器形名称や概念は斉一でない。そのため、土器名称の使われ方に微妙なズレがみられることもある。そこで本稿では、中国で使用されている土器の名称を、以下の分類規準によって使用した。

「碗」—口径が20cm以下の茶碗状の小型のもので、口縁部が直立またはやや外反する。平底・丸底の両方を含める。

「盆」—広口の浅鉢形で身の高さが口径より小さい。口縁部が外反するもの、やや内傾するもの、また肩部が張るものも含める。胴部は極端に張らず、底部は平底である。

「鉢」—広口の深鉢形で、身の高さが口径よりも大きい。

「罐」—口縁部がすばまり、胴部が張る。平底である。

垂弧文	
凸弧文	
対三角文	
背三角文	
豆莢文	
花卉文	
回旋鉤連文	
網格文	
窄帯文	
平行線文	

図2 文様の分類 (巖1965原図を改変)

### 3 仰韶文化遺跡での出土状況

晋南・豫西<sup>(3)</sup>地域と渭河<sup>(4)</sup>流域

廟底溝遺跡—河南省陝県（中国科学院考古研究所編著1959）

廟底溝類型の標準遺跡である。1956・57年に、黄河のダム工事に伴って中国科学院考古研究所が発掘調査をおこなった。遺跡は青龍澗が黄河と合流する地点から東南に約10km離れた青龍澗南岸に位置し、河面より40mほど高い台地上に所在する。3層の文化層が確認され、最下層が廟底溝類型期に比定されている。この層からは、住居址、墓、灰坑等の遺構が検出されている。

彩陶の出土状況について、各遺構ごとに述べてみよう。仰韶文化の層からは2基の住居址が発見されている。平面形が長方形の竪穴住居址で、床面にすき入りの粘土を7～14cmの厚さに塗り、住居の周囲もやはりすき入りの粘土壁を構築しており、発掘時には30～70cmの高さの壁の残りが検出された。仰韶文化の土器片は住居址の覆土から出土しているが、土器片がどのような彩陶であるかは不明である。

廟底溝類型期の墓は、わずか1基発見されたにすぎない。深さ1.24m長方形の竪穴土坑墓であると思われる。墓の南半分は灰坑によって攪乱されているため、埋葬人骨の下半身は喪失している。人骨は仰臥伸展葬で埋葬され、頭位は北向きであり、副葬品はない。

灰坑は168基発見されている。出土遺物はさまざまであるが、最も数量の多いものは土器片で、大半の廟底溝類型期の彩陶片も灰坑から出土している。図3・4の25～27の彩陶はすべて灰坑から出土した。また4基の灰坑からは人骨が発見されているが、一体の人骨に指輪が発見されている以外は副葬品は認められないという。以上のように、彩陶を含む土器片は、大半が文化層中および灰坑、または住居址の覆土から出土しており、埋葬に伴う事例は報告されていない。

彩陶の器形には、碗、盆、鉢、罐の4種類がある。図2の2～5は碗で、5は口径16.8cm、高11.6cmを測り、黒彩で垂弧文を施す。図2の11～14は盆である。12・14は、2点とも口縁部が胴部に対し直角に折れ胴部が若干張る平底の器形であり、黒彩で回旋鉤連文を施す。13は口径32.4cm、高さ15.6cmを測り、口がすばまり肩部が張る平底の器形で、黒彩で垂弧文と円点文、そして平行線文を組み合わせた文様を施す。図3の6～9は鉢である。8は口径22.8cm、高18.9cmを測り、口縁部の立ち上がりかほとんどなく、口がすばまり肩部の張る平底の器形である。肩部から胴部にかけて黒彩で回旋鉤連文を施す。6は口径約18cm、高16cm、9は口径は約20cm、高16cmで、いずれも口が広がり胴部のあまり張らない平底の器形である。6は胴部に凸弧文を、9には花卉文を施す。図3の10及び図4の25・26は罐である。図4の25は口径20.5cm、高32cm、底径13cmを測り、口縁部がすばまり胴部が張る平底の器形で、胴部に凸弧文を黒彩で施す。図3の10は胴部に回旋鉤連文を施す。

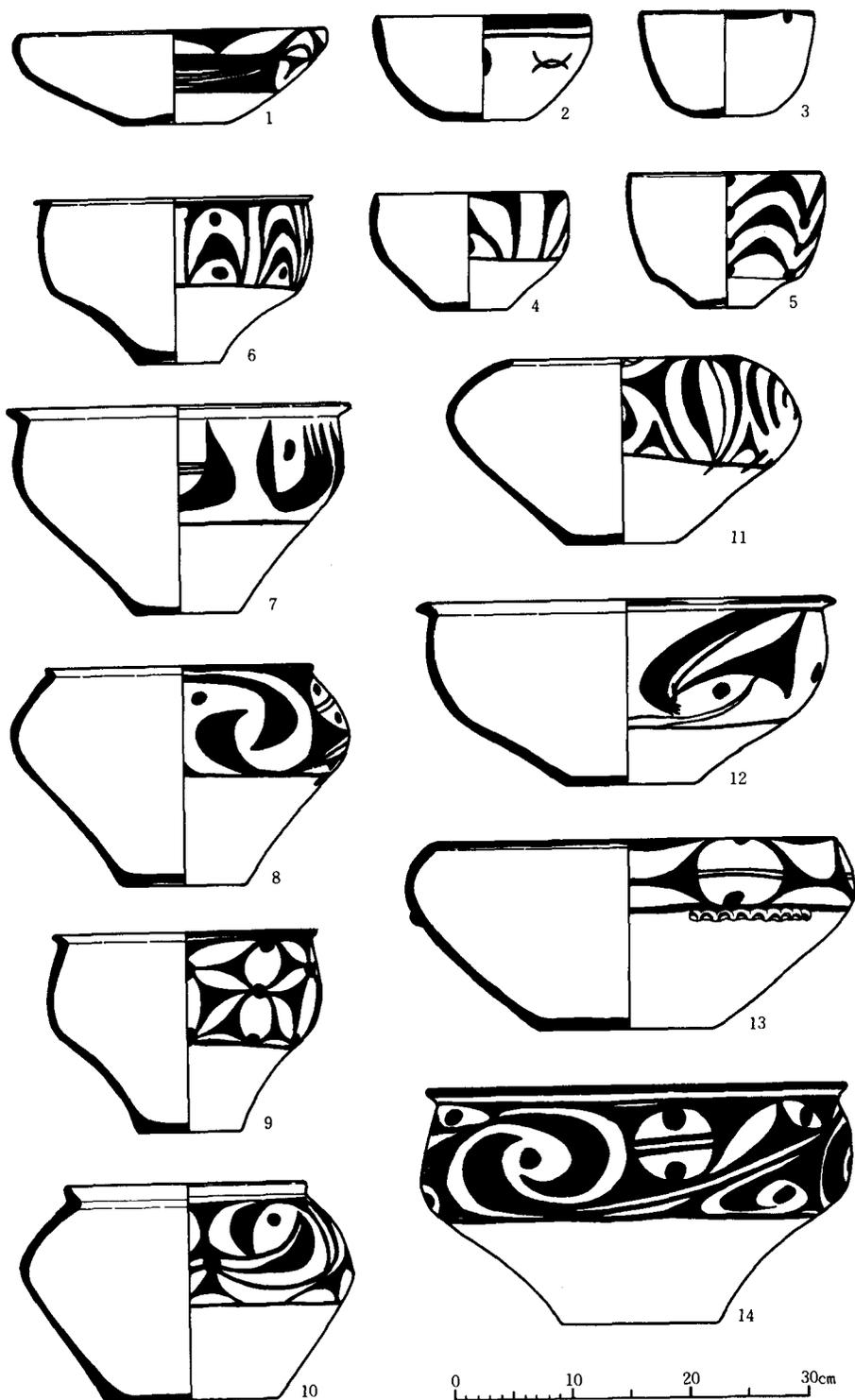


図3 仰韶文化廟底溝類型期の彩陶(1)

1~14 廟底溝遺跡

**西王村遺跡**—山西省芮城县西王村（中国科学院考古研究所山西工作队1973）

1960年に中国科学院考古研究所山西工作队が発掘調査をおこなった。遺跡は黄河北岸の河面より50～60mの高さをもつ台地上に位置する。上層は仰韶文化後期に比定される西王村類型で、下層はさらに早・晩の2時期に分期され、早期が廟底溝類型期に相当し、廟底溝類型系の彩陶が出土している。遺構は灰坑が6基、甕棺が1基発見されている。しかし、甕棺内部には遺物は副葬されておらず、大半の彩陶は灰坑から他の土器片とともに出土している。

彩陶は、碗と盆の2種類の器形がある。彩陶の主な文様は、垂弧文、花卉文、網格文で、碗は主として黒彩で、垂弧文を施す（図4—8～24）。盆は口径が15～50cmと、大きさに差がある。22は口縁部の破片から復元したもののだが、口径24cmで、口縁が外反し胴部が張る。底部の形は欠損して不明であるが、器面に黒彩の回旋鉤連文を施す。

**姜寨遺跡**—陝西省臨潼県（西安博物館他1988）

発掘は1972年に始まり、1979年まで合計11回おこなわれた。遺跡は臨河の台地上に立地し、文化層は第1期から第5期に分期されている。第1期の文化層から中央に広場をもつ集落址と120基の住居址が発見された。

第3期が廟底溝類型期に比定されるが、文化層は遺跡の西部およびトレンチ内で発見されたため、発掘面積は小さく、灰坑、袋状ピット等の遺構が発見されているだけである。住居址、墓は見つかっていない。

彩陶はすべて破片で、完型品は出土していない。彩陶の器形は盆が確認されているが、口縁部は外反するか若干垂れ下がり、胴部はあまり張っていない（図4—1・3）。文様はすべて黒彩で、垂弧文、花卉文、豆莢文、円点文を施す。

**王家咀遺跡**—陝西省岐山県（西安半坡博物館1984）

陝西省考古所が1959年に始めて調査をおこない、1982年に西安博物館が発掘調査をおこなった。遺跡は南に向かって低くなる緩斜面に立地し、廟底溝類型期と仰韶文化晩期の層が確認された。廟底溝類型期の層からは、10基の灰坑、4基の窯跡、3基の墓葬が発見されている。

墓葬は3基の内、2基は平面長方形の土坑墓で2号墓は保存状態が良好であった。それによると、人骨は仰臥伸展葬で埋葬され副葬品はない。もう1基は小児甕棺墓で、やはり副葬品をもたない。廟底溝類型系の彩陶は、すべて灰坑から出土しており埋葬に伴う事例は報告されていない。

彩陶の器形は碗、盆の2種類で、碗には垂弧文を盆には回旋鉤連文を施す。

**河南中部地域<sup>(5)</sup>****大河村遺跡**—河南省鄭州市（鄭州市博物館1979）

1972年から1975年にかけて、鄭州市博物館が7回の発掘調査をおこなった。遺跡は鄭州市の

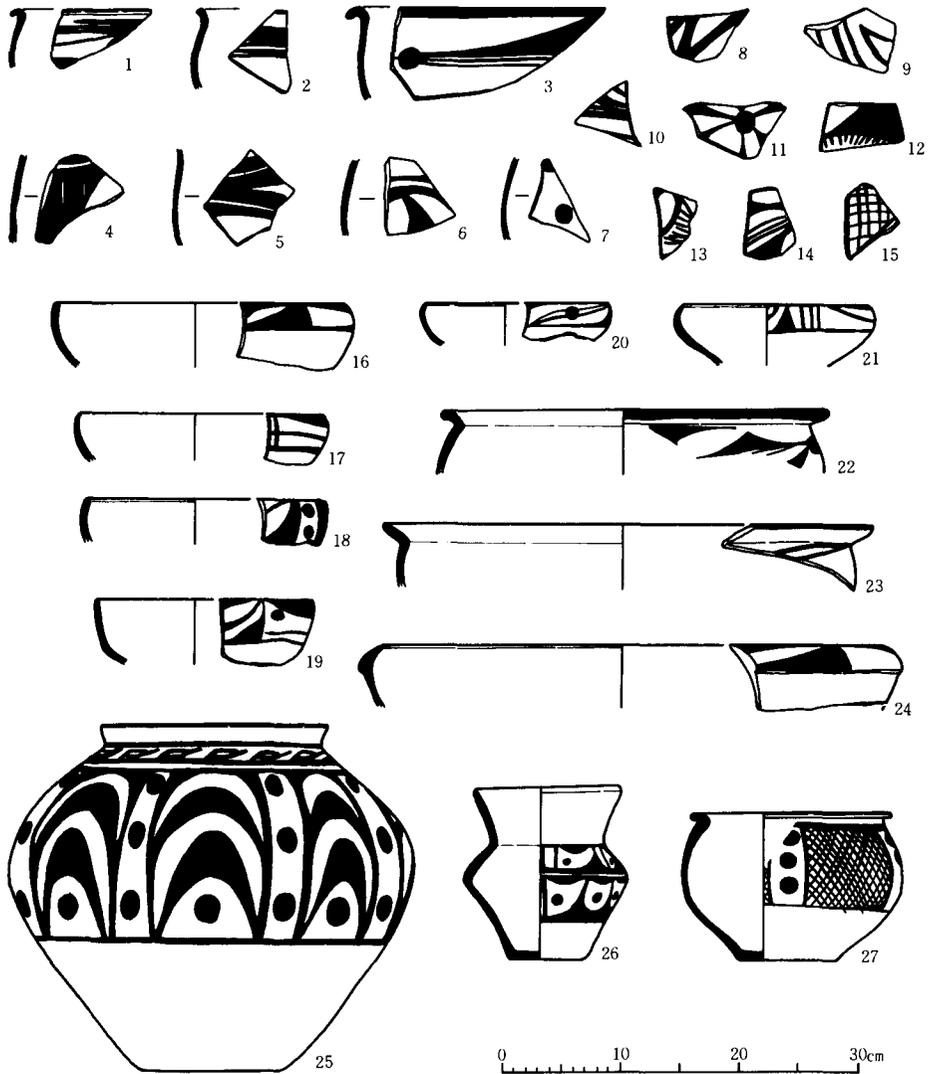


図4 仰韶文化廟底溝類型期の彩陶(2)

1～6 姜寨遺跡, 8～24 西王村遺跡, 25～27 廟底溝遺跡

北東に位置し、比高差2～3mの微高地上に立地する。層序によって5期の時期編年をおこなっており、第1・2期文化が仰韶文化廟底溝類型期に比定される。

第1期文化の彩陶の器形には碗、盆がある。図5の9・11は、口径12cm前後と小型で、口縁部がほぼ直立し底部が平底を呈する碗で、口縁部の器面に赤色で帯状の彩色を施している。10は底部が欠損しているが口縁部がやや外反する碗で、内外器面を白色で下地を塗った後、褐色の豆莢文を施す。盆の文様は回旋鉤連文が主である。14は口縁部が胴部に対してほぼ直角に外反しており、底部が平底になるとおもわれる。内外器面に淡黄色のスリップをかけた後、外器面に褐色の回旋鉤連文を施す。彩色を施す土器は碗、盆など盛食用土器に限られ、煮沸用や貯

蔵用の尖底壺に施される事例はない。ところで、第1期文化では、遺構は確認されておらず、彩陶がどのような状態で出土していたかわからない。

第2期文化の彩陶の器形は鉢が主流になり、彩陶の盆、碗は減少する。また第1期文化に較べ白色スリップをかけたものが増加し、褐色と白色の二色で彩色する彩陶も増える。22は口径が20.8cm、高18cm、底径が12cmを測り、口縁部がすぼまり胴部が張る平底の鉢である。器面に黒彩で回旋鉤連文を施す。19はやはり口縁部がすぼまり胴部の張る鉢であるが、胴上半部に白色スリップを施した後、黒彩と紅彩で回旋鉤連文を施す。また大河村遺跡では、廟底溝類型系の彩陶とは異質な文様をもつ彩陶が第2期文化から出現し、その文様には、まつ毛状文、三日月文、三角円点文、網状文、円点文といったものがある(2~4・6・7)。第1期と同様に盛食用の碗、鉢には彩色を施すが、煮沸用、貯蔵用の土器には彩色を施さない。

次に、遺構と彩陶の出土関係について述べよう。第2期文化では、平地建築住居と幼児の甕棺墓が1基発見されている。甕棺墓は、平面形が幅46cm、長さ80cm、深さ50cmの竪穴土坑の底に、豆と罐が口を横向きにして組み合わせておかれ、その中に幼児遺体が安置してあった。副葬品は発見されていない。

住居址は22号住居と呼ばれているが、形状は不明である。床面積は、およそ4平方メートルを測る。北側と西側に高さ38~45cm、厚さ28cmの壁の残りが発見された。北の壁はやや内側に傾斜し、壁の中に約40cm間隔の柱穴が検出されている。壁は泥に草と砂を混ぜて作っており、火を受けて壁の中心まで粘土の色が変色している。住居の床面には木炭と草木の炭化物が4~5cm堆積し、しかもその上を「紅焼土」が厚くおおっていた。また住居の床面は、15cmほど砂質の泥で火を受け堅く黒褐色に変色していた。以上のような状況から考えて住居の保存状態は良好で、内部の遺物は原位置を保っているものと思われる。床面から出土した遺物は多くないが、鹿の角、豚の骨、そして土器片が出土している。煮沸用、盛食用、貯蔵用の土器が一通り揃い、これらの土器構成に白色スリップをかけた廟底溝類型系の彩陶鉢が相伴している点が注目される。このことは大河村遺跡出土の廟底溝類型系の彩陶が、住居址の内部で他の土器、つまりその他の生活用具との組み合わせで、日常的に使用されていたことを暗示している<sup>(6)</sup>。

#### 王湾遺跡—河南省洛陽市(北京大学考古実習隊1961)

北京大学考古学実習隊が1959・60年に発掘調査した(北京大学考古学実習隊1961)。遺跡は洛陽の西約15kmに所在し、澗河の右岸の台地上に立地する。層序は北朝、周代の文化層及び、3時期の新石器時代層からなる。崧文明はさらに新石器時代層を細分し、1期1段、1期2段、2期1段、2期2段、2期3段、2期4段の6期に分けている(嚴1989)。それによると大河村遺跡の第2期文化が王湾遺跡の1期2段に比定され、大河村遺跡の第1期文化は、王湾遺跡1期1段よりも少し時期が下るとい<sup>(7)</sup>う。1期1段、2段が廟底溝類型期に比定されている。

1期1段の彩陶は非常に少なく、その施文方法は口縁部外器面に帯状に彩文するごく簡単な

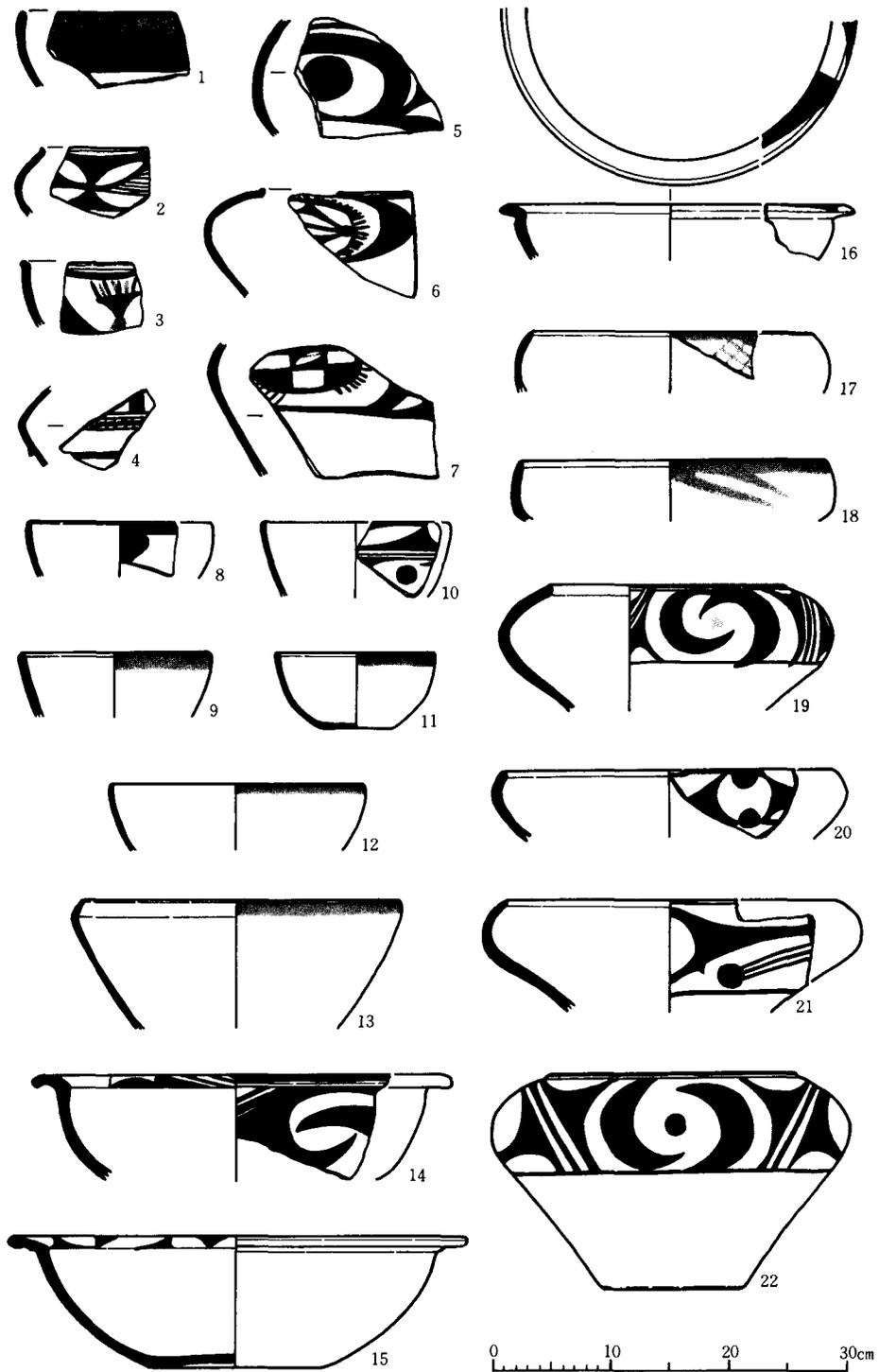


図5 仰韶文化廟底溝類型期の彩陶(3)

1・5・16 長葛石固遺跡, 2~4・6~15・17~22 大河村遺跡

ものらしい。しかし、1期2段の時期になると彩陶の種類も増え、典型的な廟底溝類型の彩陶の文様である回旋鉤連文も比較的多く発見されているもようである。さて、彩陶の出土状況と遺構の関係についてであるが、王湾第1期文化層から、住居址7基、灰坑8基、墓葬が76基発見されている。彩陶の住居址・灰坑での出土状況は不明である。墓葬は76基の内、4基が二層台をもつ竪穴土坑墓で、25基が竪穴土坑墓、尖底瓶甕棺が43基発見されている。成人人骨は仰臥伸展葬で頭位は西北を示し、頭骨に朱彩を施すのが一般的である。またほとんどの墓には副葬品が見あたらないが、仰臥伸展葬の二次葬の成人女性の墓からはトルコ石製の装身具が出土している。

住居址からの彩陶の出土状況が確認された訳ではないが、少なくとも王湾遺跡では、76基の墓が発見されながら、彩陶は墓には副葬されておらず、彩陶は明器ないし宝器的な扱いをうけていない。

#### 長葛石固遺跡—河南省長葛県（河南省文物研究所1987）

遺跡周囲は平原地帯で、遺跡は石梁河の北岸に立地する。1978年から1980年にかけて河南省文物研究所が、4回発掘調査をおこなった。発掘時の層序と土器の型式編年から8時期に区分され、第I～IV期文化が裴李崗文化、V～VI期文化が仰韶文化に比定され、第VI期文化が廟底溝類型期に相当する。

遺構は、灰坑と墓が発見されている。墓は平面長方形の竪穴土坑が10基発見されており、その大きさはおよそ幅30～70cm、長さ1.7～2.0m、深さ30～50cmを測る。仰臥伸展葬で人骨の頭位は、大半が東南を向くが、一部西北、西南方向を向くものもある。墓坑の内部からは、副葬品は発見されていないようである。

廟底溝類型系の彩陶片は灰坑から出土しているが、詳しい出土状況は不明である。大半が破片で、完型品は発見されていない（図5—1・5・16）。1の彩陶片は口縁部が直立し、胴部の張らない碗であろう。口縁部の外器面に3cm幅で帯状に茶彩を施す。5の彩陶片は、発掘報告書では盆に分類されているが、口縁部がすばまり胴部の張る鉢であろう。外器面に黒彩で回旋鉤連文を施す。16は口縁部が胴部に対して直角に外反する盆で、口径28cmを測る。口縁部の内側に、幾何学文と思われる黒彩がある。

#### 高嶺遺跡—河南省偃師県（中国科学院考古研究所洛陽発掘隊1964）

遺跡は、偃師県城の西南15kmのところに所在する。遺跡の広がり、東西約600m、南北約200mと広く、仰韶文化の文化層の厚さは1～4mを測る。

遺構には、灰坑と住居址2基が確認されている。詳しい状況は不明だが、住居址の床面は固く焼き締められており、廟底溝類型系彩陶の罐が、住居址内から出土している。

彩陶は短い口縁部がほぼ垂直に立ち上がり、肩部の張る平底の鉢で、白色のスリップを肩部にかけたのち、紅彩で回旋鉤連文と星形の中心に円点文を加えた文様を施すものと、器面に白

色のスリップをかけた上に網格文と弧線文を施すものがある。

#### 4 大汶口文化遺跡での出土状況<sup>(8)</sup>

大墩子遺跡—江蘇省邳県四護鎮 (南京博物院1964, 1981)

遺跡は、直径250m、比高差4.3mの微高地上に立地する。1962年に発見され、翌63年と64年に、南京博物院が中心となって発掘調査がおこなわれた。層序は上・下の二層にわかれ、上層はさらに墓の切り合い関係から、早期墓と晚期墓の2期に分期される。廟底溝類型彩陶は早期墓から出土している。出土状況を30・33号墓を例にとってみよう(図6)。いずれの墓も土坑をもっていない。埋葬法は仰臥伸展葬で、彩陶は口を下にして、埋葬人骨の足首全体をおおうようにして副葬されている。被葬者は、いずれも30歳前後の女性である。

彩陶の器形は、盆と鉢の二種に分かれる。図7の1・2・4・6はいずれも口縁部がすばまり、肩部が張る平底の盆である。廟底溝遺跡や大河村遺跡の器形に較べて、身の高が低くなる。文様はいずれも肩部に白色のスリップをかけた後、紅彩と黒彩の二色で文様をほどこす。2・4は回旋鉤連文を施している。1は背三角文と花卉文の組み合わせで、河南中部から渭河流域にかけては見られない文様構成である。6の文様は垂弧文である。3・5は口縁部が外反し、胴部が若干張る平底の鉢で、盆と同様にまず胴上半部に白色でスリップをかけた後、紅色と黒

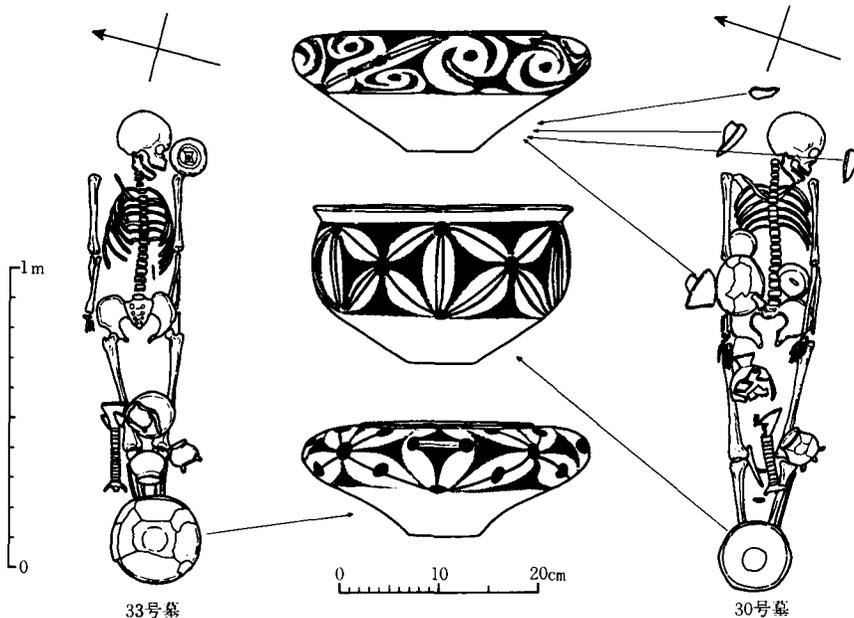


図6 大墩子遺跡30・33号墓彩陶出土状況

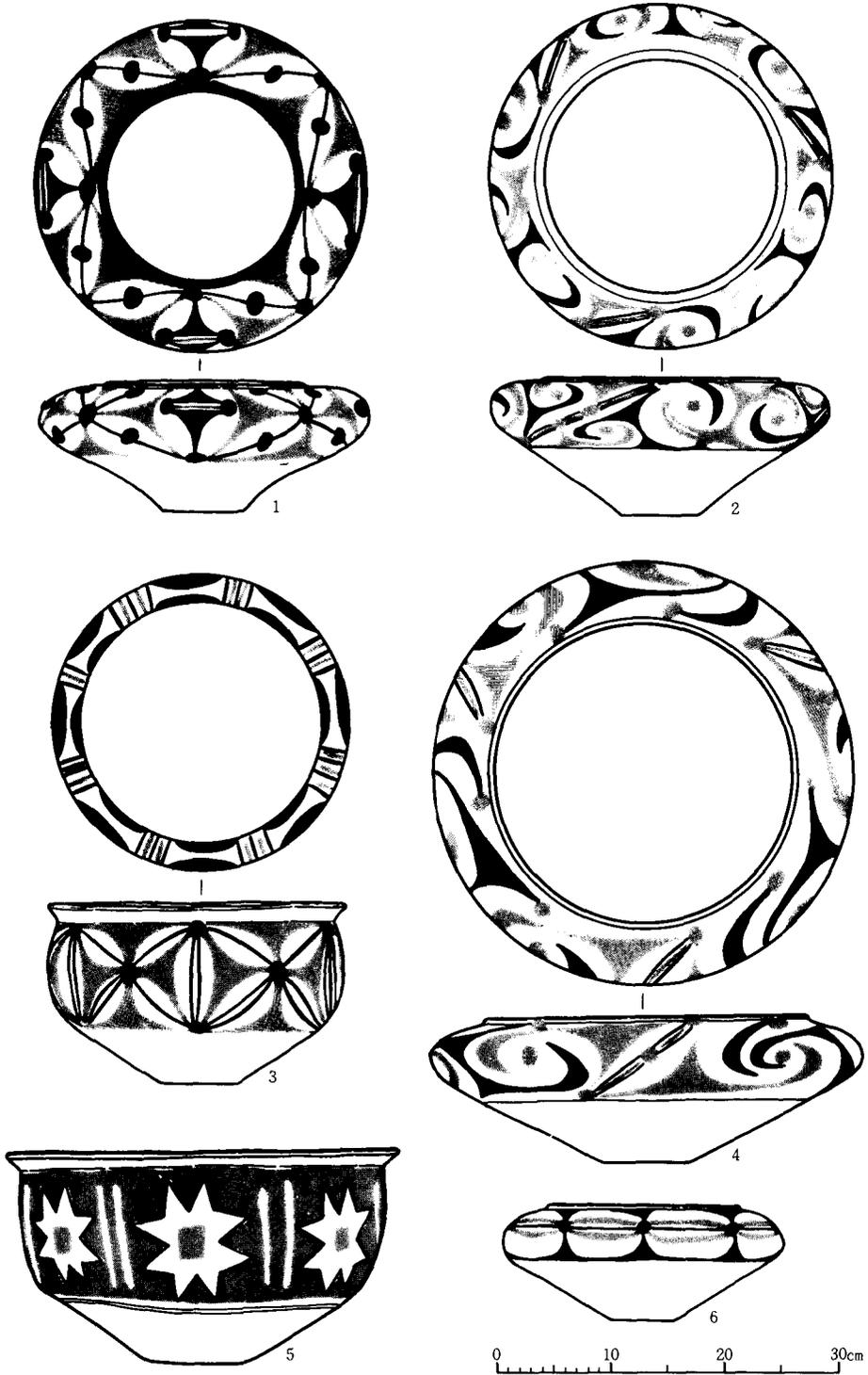


図7 大汶口文化の彩陶(1)

1～6 大墩子遺跡下層墓

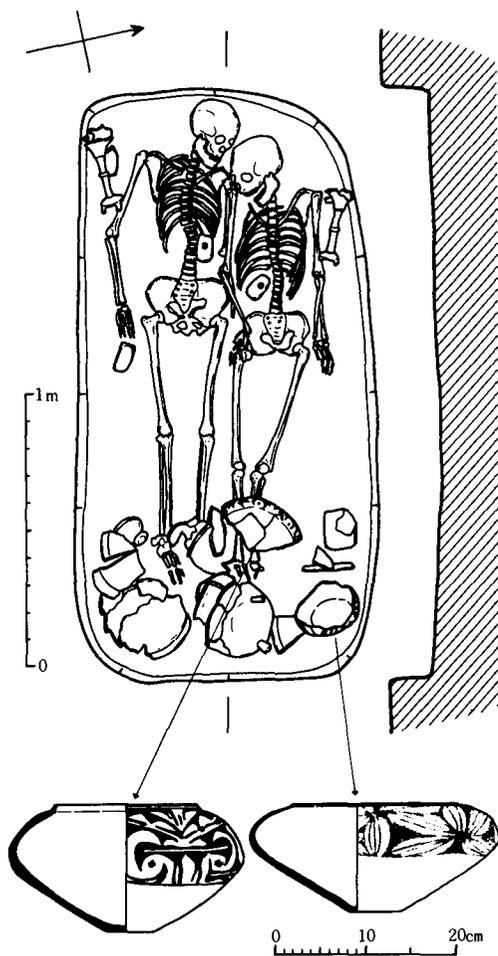


図8 王因遺跡2376号墓彩陶出土状況

すべて大汶口文化に比定されている。墓以外に、竪穴式住居が発見されているらしい。墓は早・中・晩期の3期に分期され、廟底溝類型系の彩陶は晩期墓から出土している。2376号墓は、平面長方形の竪穴土坑墓で、成人男性の合葬墓である。彩陶は2点副葬されており、1点は大墩子遺跡の例と同様、彩陶の口を下にして、被葬者の足首をおおうようにして副葬されている。もう1点は、足元から少しはなれた、墓坑壁直下で発見された(図8)。

図9の2・3が2376号墓から出土した彩陶である。いずれも口の若干すばまる短頸の盆で、2は肩部に白彩でスリップをかけた後、紅彩で花卉文様を施す。3もやはり肩部に胸部にかけて白彩でスリップをかけた後、文様を施すが、おそらく回旋鉤連文のくずれた文様であろう。

**野店遺跡**—山東省鄒県(山東省博物館1972, 山東省博物館・山東省文物考古研究所1978)

色で彩文を施す。3は花卉文を主体とし楕円形文様の中に条文を施す。5は星形の文様と方形の文様を組み合わせたものである。

大墩子遺跡でも晩期墓になると、盆・鉢以外の器形、たとえば壺に彩文を施すようになる。しかし、大汶口早期墓の時期は、彩文は仰韶文化地区で認められたように、盆と鉢のみで、文様構成も仰韶文化地区では認められないものも若干あるが、基本的な文様はすべて廟底溝類型系のものである。また、大墩子遺跡で発見された彩陶には単色の彩陶はなく、いずれの彩陶も白彩、紅彩、黒彩の三色を用いている。報告者は、これらの彩陶が仰韶文化地域の遺跡から、搬入された可能性をほのめかしている。

**王因遺跡**—山東省兗州県王因(中国社会科学院考古研究所山東工作隊1979)

遺跡は、丘陵地帯と平原地帯の境目に位置し、周囲は海拔40~50mと非常に平坦な地勢を形成する。周囲から1.5mほどの微高地上に、遺跡は立地する。1976年から1978年にかけて、中国社会科学院考古研究所が中心となり5回にわたる発掘調査をおこなった。耕作土から下の文化層は三層に分層されるが、す

遺跡は大沙河と臨竜河の間に挟まれた台地上にある。1965年に発見され、1971・72年に山東省博物館と山東省文物考古研究所が中心となって、発掘調査をおこなった。大汶口文化の層と龍山文化それに周代の層が、連続して堆積している。大汶口文化の文化層からは、灰坑17基、住居址6基、墓が21基発見された。

図9の5は廟底溝類型系の彩陶で、口縁部がすばまり肩部が張る平底の盆である。肩部に白色のスリップをかけた後、紅彩黒彩で回旋鉤連文を施す。その他に在地で独自に変化を遂げたと思われる彩陶が、多数発見されている。

彩陶と遺構の出土関係について、述べておこう。当遺跡で出土した廟底溝類型系の彩陶（5）は、採集品のため出土状況はよくわからないが、その他の彩陶は、大半が墓に副葬されていた。野店遺跡では、住居址と遺物の関係が、山東地区では比較的明らかになっており、遺物の出土状況もほぼ把握できる。住居址は、不定形気味の円形竪穴式住居址で、その大きさは直径は5.6～6.0m、深さは35cmを測る。住居址から出土した遺物は、覆土からと住居址床面直上から出土したものとわけられる。それによると覆土からは彩陶盆の破片が出土している。床面直上からは2点の鼎、碗、盆が、完型品の状態で出土しており、この器種の組み合わせが日常生活の基本的な容器の土器構成を表していると考えられる。

#### 劉林遺跡—江蘇省邳県（江蘇省文物工作隊1962, 1965）

遺跡は中運河の東岸に位置し、標高は約25mと低い。1958年中運河の堤防工事の際、発見され、1958年に江蘇省文物工作隊によって、1964年には南京博物院によって調査された。層は3層に分層され、最下層が新石器時代の文化層で、197基の墓、住居址と思われる焼土面、灰坑1基と大量の遺物が発見された。さらに3層で発見された墓は、切り合い関係から早期墓と晚期墓に分けられる。

102号墓の彩陶は、報告の記述からおそらく廟底溝類型系の彩陶と思われる。墓には墓坑は見あらず、人骨は膝から下が、漢時代の墓によって破壊されている。男女の合葬墓で、両者ともに55歳以上の老人だという。彩陶は、女性の被葬者の腰の部分に副葬されていた。

図9の4は72号墓から出土した廟底溝類型系の彩陶で、口がややすばまり、肩部の張る平底の盆である。肩部から胴部にかけて白彩のスリップをかけ、その上に紅彩で回旋鉤連文を、黒彩で円点文を施す。報告者は、彩文が剥落しやすいことと、土器の質が脆弱で焼成温度が低いと考えられることから、現地生産の可能性を示唆している。

## 5 出土状況の比較

まず、器形と文様について述べてみよう。仰韶文化の地域と大汶口文化の地域とでは、彩陶の器形と文様に相違が認められる。渭河流域から河南中部地域の廟底溝類型系彩陶は、文様が

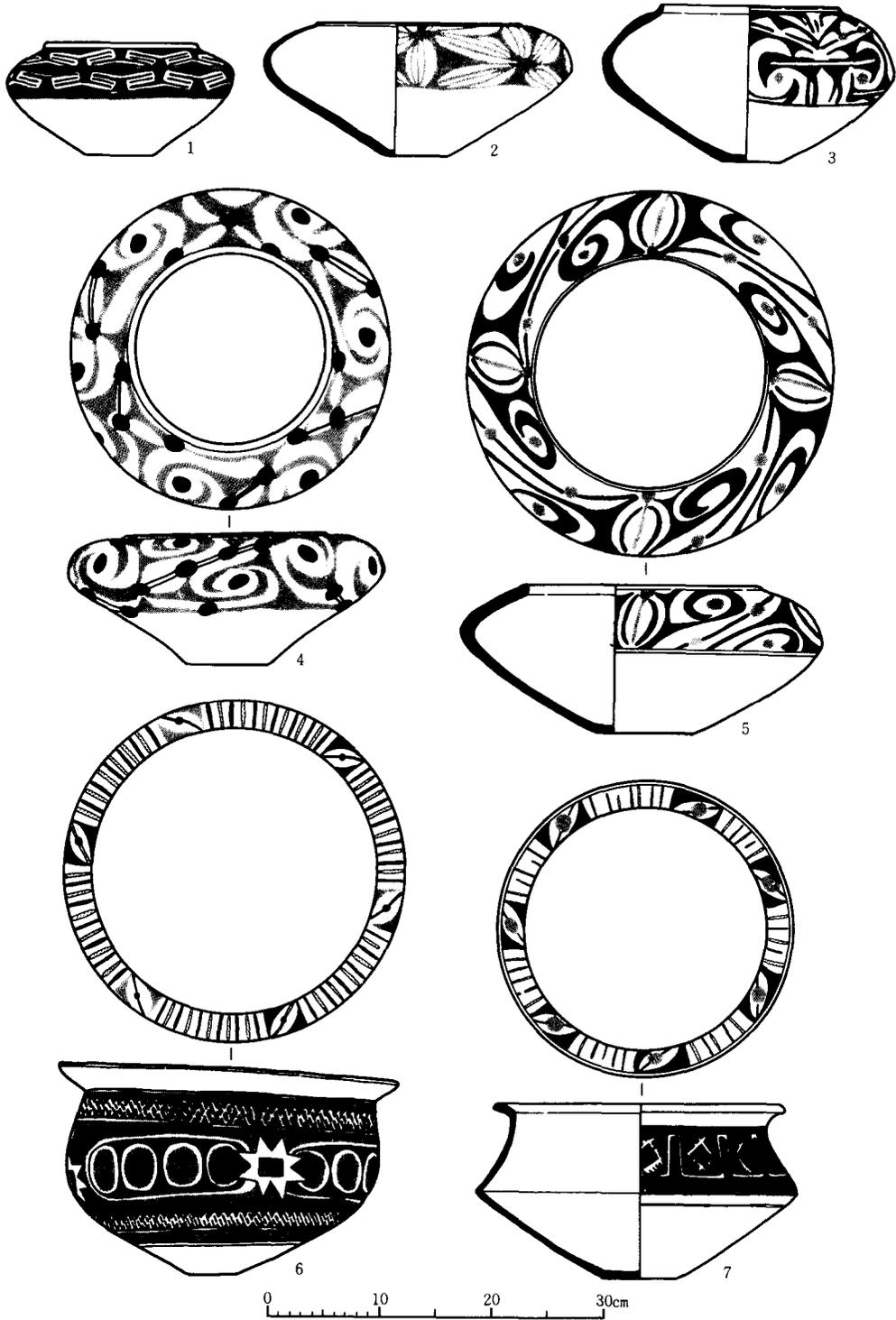


図9 大汶口文化の彩陶(2)

1・4 劉林遺跡, 2・3・7 王因遺跡, 5・6 野店遺跡

碗・盆・鉢・罐の4種類の器形に施され文様の種類も多い。しかも、嚴文明が指摘しているように、文様と器形とにはある程度の関連が認められる。すなわち、碗の文様は垂弧文を主とし回旋鉤連文を施さない。鉢・盆には回旋鉤連文・花卉文を主として施すが垂弧文も認められる。

一方、山東地区の、大汶口文化早期の諸遺跡で発見される廟底溝類型系彩陶の器形は、口縁部の立ち上がりがごく低く、口がすばまり肩部の張る平底の器形の盆が主となる。しかも、口縁は広がるかまたは外反し、胴部のあまり張らない器形は少ない。また、大汶口文化早期には、罐に廟底溝類型系の文様をほどこすものも見つかっていない。

さらに文様にも片寄りが認められ、施される文様は花卉文、回旋鉤連文系が主となる。しかも、文様の多くは白色スリップをかけたのち、紅彩または黒彩で文様を施し、色彩も豊かで非常に丁寧な作りである。白色スリップをかけ、紅彩や黒彩で文様を施す方法は、もちろん廟底溝類型の技術であるが、仰韶文化の遺跡で出土する彩陶の中でも、このような彩陶の出土はそれほど多くない。

以上のように、彩陶の器形と文様からみると、大汶口文化早期の集団に廟底溝類型系の彩陶が伝わった際に廟底溝類型系彩陶のうち一部の器形と文様が選択的に取り入れられた可能性が窺える。

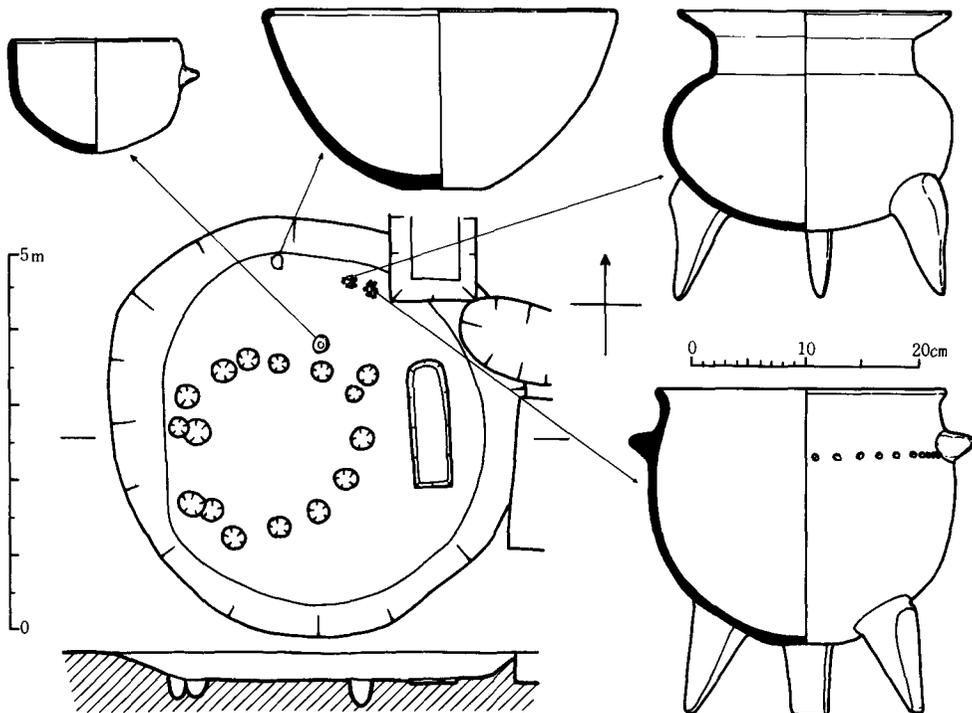


図10 野店遺跡22号住居址内土器出土状況

次に出土状況について述べてみよう。河南中部地域および渭河流域の仰韶文化地域において、廟底溝類型系の彩陶は、基本的に灰坑または住居址から発見される。たとえば、大河村遺跡は遺跡の保存状況もよく遺物の出土も原位置を保っていると思われ、当地域の彩陶の出土状況を知る上で非常に重要であるが、廟底溝類型系の彩陶は、住居址の床面から、しかも他の日常土器と共伴して出土している。高崖遺跡でも大河村遺跡と同様に、住居址床面からの出土が確認されている。また廟底溝遺跡では灰坑から大量に彩陶が出土している。一方、渭河流域の墓制の特徴である竪穴土坑墓と甕棺の両者に、廟底溝類型系彩陶が副葬された確実な事例は、現在のところ認められていない。横田禎昭は、半坡類型期と廟底溝類型期の墓を分析している（横田1975）。それによると陝西省渭河流域の廟底溝類型期の墓では、一部の墓に遺物が集中して副葬される例が認められるが、河南中部地域の廟底溝類型遺跡では、墓に遺物を副葬すること自体が非常に少ない。たとえば、河南中部地域で竪穴土坑墓の例では、王湾遺跡で確認されたトルコ石の副葬が目を引く程度で、長葛石固遺跡にいたっては一点も副葬品が発見されていない。以上のことから、渭河流域から河南中部地域における廟底溝類型系の彩陶は、その他の土器とともに日常生活の中で使用されたと考えられ、墓に副葬するといった習慣はあまりなかったであろうと推測される。

一方、山東地区における大汶口文化では、住居址と彩陶の共伴関係が明らかな類例は少ない。野店遺跡の例では、彩陶は住居址覆土から出土しているが1点のみであり、少なくとも住居址の床面から彩陶は出土していない。この地域での廟底溝類型系彩陶の出土状況の大きな特徴は、副葬品として発見される点にある。河南中部、晋南、豫西、渭河流域地域ではおこなわれなかった彩陶を明器として副葬するという習慣が、山東地区では王因・大墩子・劉林・野店の各遺跡でみられる。このように廟底溝類型系の彩陶は、山東地区に伝わった段階で、すでにその用途において相当変化したことがわかる。つまり食生活用の容器から墓の明器への変化である。

では、大汶口文化早期に現れ、しかも明器へと変化した廟底溝類型系の彩陶について、どのように理解すべきだろうか。そこで、次に遺跡の発掘が大規模で、墓群の特徴も把握しやすい大墩子遺跡と劉林遺跡をもう一度取り上げ、彩陶の墓葬内での扱われ方を分析して、彩陶を副葬された人物が、その集団内でどのような性格をもっていたか考察してみたい。

## 6 大汶口文化の墓制と彩陶

### 大墩子遺跡（図6）

大墩子遺跡では15基の墓から彩陶が出土しているが、その内、明らかに廟底溝類型系の彩陶が出土していると判断できるのは、5基である。<sup>(9)</sup>廟底溝類型系彩陶が副葬された墓の特徴をまとめたのが表1である。副葬品の内、彩陶は省いてある。

表1 彩陶出土墓の葬制と副葬品

	性別	年齢	頭位	葬制	副葬品数	副葬品の種類
30号墓	女	約30	75度	仰臥伸展葬	12点	土器・骨柶・石礪
33号墓	女	約30	74度	仰臥伸展葬	10点	土器・獐下顎骨・骨針・紡錘車
145号墓	女	中年	76度	仰臥伸展葬	4点	土器・骨柶・豚牙の装飾品
252号墓	男	中年	85度	仰臥伸展葬	9点	土器・石鏟・骨鏃
288号墓	男	?	70度	仰臥伸展葬	6点	土器・石礪・骨鏟

それでは、彩陶を副葬しない墓と彩陶を副葬する墓に、葬制上相違が認められるか較べてみよう。頭位は劉林期墓の188基の内、7基がほぼ東を向き、1基が東北を向く。その他の墓の頭位はすべて東北東を向いている。彩陶を副葬する5基の墓も、やはり東北東を向いており特別な相違は認められない。埋葬形態は合葬以外に単身葬が182基あり、その内174基が仰臥伸展葬である。副葬品数では、副葬品が1点だけという墓が全体の13.9%を占め最も多く、次に多いのは副葬品点数2点で10.2%である。そして副葬品が0～4点という墓が全体の60%近くを占める。一方で副葬品点数が9点以上の墓は全体の約20%で、さらに10点副葬品がある墓は、1.0%、12点は3.2%と少数であり、彩陶を副葬する墓の副葬品数は、その他の墓の平均と較べると多く、副葬品が豊かだといえる。

副葬品の種類からは、彩陶をもつ墓にだけ特別に副葬する種類の品物といったものはない。早期墓全体の遺物別にみた副葬の様子を概観すると、土器の副葬が飛び抜けて高く、全体の70.0%の墓で出土しており、次に骨角器(40.4%)、装飾品(23.4%)、石器(22.9%)、自然遺物(18.0%)がそれに続く。遺物ごとの器種による副葬をみると、骨角器では鏟、針、柶、鏃、管、獐牙勾形器の順に多く、装飾品では礪、環、墜、豚牙製装飾品の順に副葬率が高い。石器は石礪、有孔石斧、石鏟の順に副葬率が高い。紡錘車は、全体の15.4%の墓に副葬される。

次に、被葬者の性別によって規定される遺物の事例をあげると、石器を副葬する被葬者の内、約9割が男性である。骨角器を副葬する被葬者では、約6割が男性でしかも、骨鏃は男性にしか伴わない。廟底溝類型系彩陶を副葬する墓に出土例はないが、獐牙勾形器を副葬する被葬者の内、8割が男性である。反対に紡錘車を副葬する被葬者の内、8割は女性である。

以上のように廟底溝類型系彩陶を副葬する墓には、副葬される遺物の種類、性差による副葬品の差において、早期墓全体の傾向から逸脱したような特徴はつかめなかった。それでは次に、墓葬の分布状況から廟底溝類型系彩陶を副葬する墓の特徴を見てみよう。早期墓は発掘区の西寄りに密集するが、後で述べる劉林遺跡の様な明確な墓群の形成は認められない。しかし、墓は北から南に向かって列を作る傾向にあり、列墓群間には性別、副葬品によって若干の差が認められ、それによってI A・I B・II・III・IV・V・VI・VII群の8墓群を設定した。

彩陶を副葬する145号墓はI B群に、33号墓はI A群に、288号墓はV群に、30号墓はVI群に

それぞれ属している。このように彩陶を副葬する墓は、一地点に集中することではなく、むしろ各墓群に分散しており、墓域・墓群の中で特に集団からは離れた位置に存在するということはない。これらの墓群中、副葬品が多い墓が集中するような墓群は認められないが、それぞれの墓群には、副葬される遺物の種類に差がある。I B墓群は石器と骨柄を多く副葬し、土器を副葬しない墓が多く、23墓中18墓が、男性墓で、女性墓より男性墓が主体である。主として石器を副葬する墓が集中する墓群としてはV群があげられる。V墓群はまた土器の副葬も多くみられ、骨角器の副葬は少ない。I A群は骨柄、紡錘車の副葬が多い。I A群以外に紡錘車が集中するところはなく、男性が主体のI B・III・V群には紡錘車は1例も伴わない。III群は、獐牙勾形器が比較的多く伴い他の遺物は少数である。土器の豆はこの墓群以外では常見されるが、III群では一例も発見されなかった。VII墓群は副葬品が極端に少なく、土器以外は出土していない。

彩陶を副葬する墓は、各墓群中でも遺物の多い墓に限られており、しかも墓域の中で一箇所に集中することはない。むしろ彩陶を副葬する墓は、各墓群に分散し、I A・I B・IV・V・VI群に1基ずつ発見されている。

#### 劉林遺跡 (図11)

廟底溝類型系彩陶を出土していると、確実に判断できる墓は晩期墓の72号墓である(表2)。

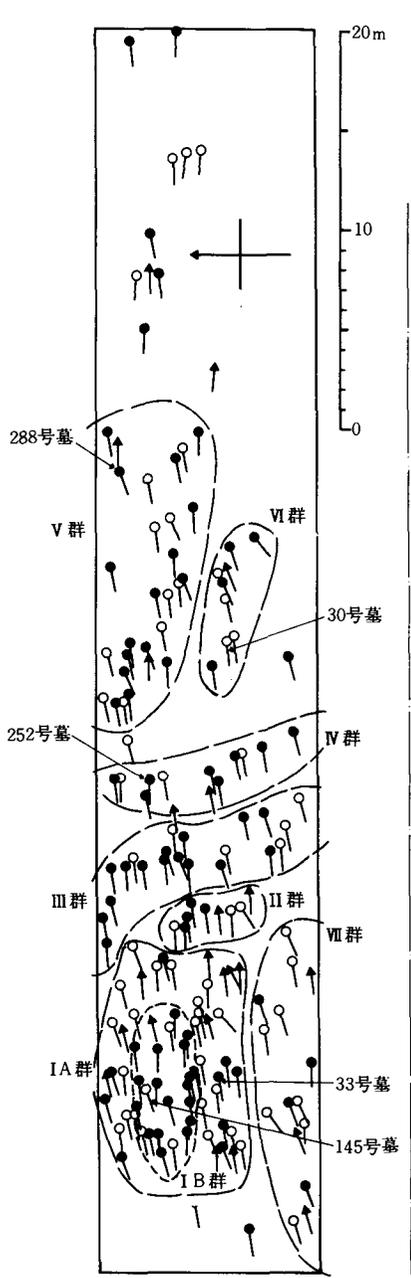
劉林遺跡の墓に関しては、渡辺芳郎が詳細な分析を試みている。以下、氏の論文を参考にしながら、彩陶を副葬しない墓と葬制上相違が認められるか、比較してみたい(渡辺1989)<sup>(10)</sup>。

二次調査で発掘された60基の内、大半が仰臥伸展葬で頭位はほぼ例外なく北を向く。副葬品を所持する墓は54基あり、副葬品点数の平均は7.2点である。副葬号点数別にみると、1～5点が23基、6～10点が最も多く21基で35%を占める。11～15点は4基で全体の6%を占めるにすぎない。大墩子遺跡の結果と同様に彩陶を副葬する72号墓の副葬品点数は12点で、その他の墓の平均と比較すると、副葬品が多いといえる。

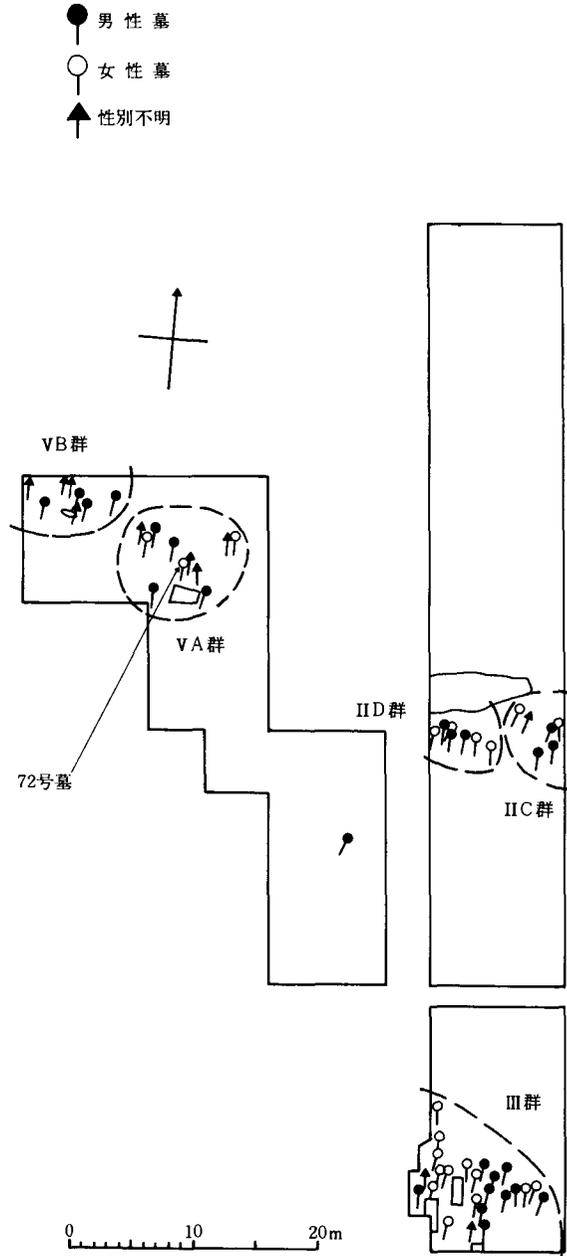
次に墓群と彩陶の関係についてみてみたい。渡辺氏は晩期墓を、II・III・V群の3群に分け、副葬品数の平均数が他の墓群と較べて多いこと、副葬品の種類が豊富なこと、また彩陶は女性に副葬されるが、やはりIII群に伴うことなどからIII群が他の墓群に対して優位であると指摘している。そして、晩期の墓群は出自集団であり、その出自集団間に優劣の差があったとしている。廟底溝類型系彩陶が出土した72号墓は、氏の分類でいうとVA群に属する。最も出自的に優位にあるとされるIII群ではなくVA群からの出土であるが、副葬品点数からいえばIII群の平

表2 彩陶出土墓の葬制と副葬品

	性別	年齢	頭位	葬制	副葬品数	副葬品の種類
72号墓	女性	青年	23度	仰臥伸展葬	12点	土器・骨柄・獐牙



大墩子遺跡下層墓分布図



劉林遺跡後期墓分布図 (渡辺1989原図を改変)

図11 墓葬分布図

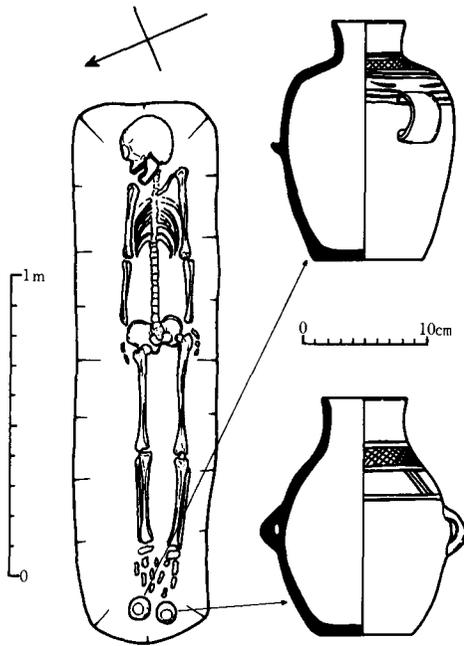


図12 大河村遺跡9号墓背壺出土状況

均点数である9.4点より多く、裕福な墓の一つであるといえる。

いずれにしても、彩陶を有する墓は副葬品を多く有しており、彩陶は墓群の中での権威の象徴として取り扱われていたと推測される。また、大墩子遺跡と同様に、彩陶を副葬する墓は一墓群に集中することはなく、VA群とIII群で出土しており、各墓群内での他の墓より優位な立場にあったことがわかる。逆にいえば、彩陶を有するということが墓群の中での権威の象徴の一つであった可能性が強い。

では、廟底溝類型系彩陶を副葬することが被葬者の出自を表すかどうか考えてみたい。ここでいう出自とは、遺跡周辺の狭い範囲内での出自ではなく、彩陶を所持する人物が、仰韶文化圏の出身かどうかという問題である。これに対して大河村遺跡でつ

ぎのような事例が発見されている。大河村遺跡4期で発見されたM9墓は、他の墓群とは東に約70m離れたトレンチで発見された。人骨は老人女性で、頭位は東南を向く。副葬品としては背壺が2点発見された。いずれも口径6cm、高19cmを測り、口縁部が直立し、胴部が若干張る平底の壺である。一对の把をもち、肩部に紅彩で直線文、網格文を施す(図12)。明らかに大汶口文化の範疇にはいる遺物である。西側で発見された墓群は竖穴土坑と甕棺墓で構成された墓で、ほとんど副葬品は発見されていない。しかも人骨の頭位は、大半が南方向を向く。大河村遺跡3・4期は、大汶口文化中期から晩期に比定されているが、当時の山東地区での埋葬人骨の頭位はほとんどが東向きである。このような事実から考えると他の墓群から離れた位置に埋葬されたM9墓の被葬者は、大汶口文化圏からやってきた人物なのであろう。それが、婚姻によるものかどうかは、現時点では判断しようがない。しかし、この墓の埋葬形態は、当時河南中部に地域における出自の違った人物に対する埋葬の一例を示している。これに対して、大墩子・劉林遺跡では、彩陶を副葬する墓の葬制は、その他の墓と副葬品の点数以外では相違がなく、墓域を異にすることもない。

以上のことから、廟底溝類型系彩陶を副葬する墓は、墓群中、副葬品を多く副葬する裕福な人物の墓であり、彩陶は集団内で他の墓に対する優位性、つまり権威の象徴として取り扱われ

た可能性が高いと考えられる。

## 7 小結

大汶口文化早期に出土する廟底溝類型系彩陶が、仰韶文化とどういう関わりの上で出現するかを追求するため、まず彩陶の遺跡での出土状況から分析をおこなった。そして、河南中部地域および渭河流域の仰韶文化地域において、廟底溝類型系彩陶は、他の土器とともに日常生活の中で使用されたと思われ、彩陶を墓に副葬するといった習慣はあまりみられなかったであろうと考えた。次に、山東地区における大汶口文化早期では、廟底溝類型系彩陶が墓で副葬品として発見されることから、彩陶自体が本来有していた食生活用の容器という機能が、明器という機能へ変化したことを指摘し、さらに大汶口文化早期の山東地区では、仰韶文化の廟底溝類型系彩陶の一部の器形と文様を、選択的に取り入れた可能性を示した。そして最後に、大墩子・劉林遺跡の墓葬を分析することによって、廟底溝類型系彩陶を副葬するのは、墓群中、副葬品を多く副葬する裕福な人物の墓であり、彩陶は集団内での権威の象徴として取り扱われた可能性が高いと推論した。それと同時に、大河村遺跡の例を参考にして、彩陶が仰韶文化圏から山東地区の大汶口文化圏にやってきた外来者としての出自を表す意味はもたないであろうと結論した。

大汶口文化早期に発見される廟底溝類型系彩陶が、現地で生産されたものかそれとも搬入されたものかは、重大な問題である。しかし、いずれにしても大汶口文化早期段階の山東地区の人々は、彩陶を実に主体的に取り入れている。それは、本来日常容器であった彩陶を明器に用途を変化させたこと、また廟底溝類型系の彩陶の中でも最も精緻で、おそらく複雑な文様のものを好んで使用したことにも現れている。

横田禎昭は、トルコ石を中心として、新石器時代晩期にすでに広範囲な交易ルートがあることを指摘した（横田1983）。また渡辺芳郎はタカラガイについても、新石器時代すでに広範囲な交易ルートの可能性を指摘している（渡辺1987）。おそらく、彩陶もこのような交易ルートによって山東地区までもたらされたのであろう。

大汶口中期から晩期、仰韶文化晩期には、河南中部地域で大汶口文化の墓が多く発見されるようになる。巖文明や武津彦は、この時期から以降、大汶口文化が西方に対して影響を与え、それは人的交流を伴ったものだと指摘したが、それ以前はやはり、仰韶文化が大汶口文化に何らかの影響を与えたとしている。

しかし、彩陶だけでは、仰韶文化と大汶口文化との関わりを解きほぐすのは難しい。その他の遺物の詳細な検討がこれから必要であろうが、大汶口文化早期の廟底溝類型系彩陶に関していえば、それは渭河流域・河南中部地域からの人の移住に伴って出現したのではなく、むしろ

交易を中心とした交流の中で生まれてきたのだらうと思われる。

## 註

- (1) 崧文明(崧1989)は、仰韶文化の研究の問題を研究史を通じて指摘しつつ、仰韶文化の編年と地域性を再検討し、社会構造をも含めた問題に論究している。
- (2) 廟底溝類型系の彩陶は、崧文明(崧1965)が廟底溝遺跡の彩陶を詳細に分析し、文様の分類をおこなっている。本文で使用する文様の名称は、崧文明の分類名称にもとづいておこなうことにする。
- (3) 晋南・豫西地域とは、山西省南部と河南西部のことである。この地域では、主要な遺跡の編年は、廟底溝遺跡1期文化、東庄村遺跡2期、西王村遺跡第5層が廟底溝類型期に比定される。これらの遺跡で、彩陶と遺構からの出土状況が判明している例は少ない。たとえば東庄村遺跡は1期と2期に分期され半坡類型期と廟底溝類型期の関係を知る上で重要な遺跡であるが、廟底溝類型期に相当する時期の遺物は少なくその内容は不明な点が多い。
- (4) 陝西省の渭河流域地域である。仰韶文化の中心のひとつであり、遺跡の密度も濃密で、その上大規模な発掘例も多い。廟底溝類型期に比定される主要遺跡には、北首嶺遺跡晚期、下孟村遺跡2期、半坡遺跡晚期、姜寨遺跡3期、泉護村遺跡1期、西安半坡遺跡中期があるが遺構と遺物の関係が判明している遺跡は、少ない。今回、取り上げた遺跡は、いずれも彩陶の出土状況が関係したものである。
- (5) 大河村遺跡1・2期が、仰韶文化中期、廟底溝類型に、3・4期が仰韶文化後期に比定される。
- (6) 彩陶の出土状況は、時期の下る大河村遺跡の第四期文化でも同様の傾向が認められる。第4期文化の彩陶の文様は独自に変化しており、廟底溝類型系の土器とは別個のものである。その出土状況は、やはり居住址の床面から他の日常使用される土器と共伴出土する。また、第4期文化では37基の竪穴土坑墓が発見されているが、副葬品はきわめて少なく、わずか5基の墓にのみ発見されている。
- (7) 1961年の報告書は簡報のため、図面が掲載されておらず図版だけでは実態がつかみにくい。ここでの記述は崧文明氏の論文を引用している。
- (8) 大汶口文化の主要な編年案には、山東省博物館の11期編年(山東省博物館1978b)、南京博物院の6期編年(南京博物院1978)、高広仁の3期編年(高広仁1980)、呉汝祚の前期、後期のそれぞれを早・晩2期に分ける4期編年などがある(呉1982)。邵望平はこれらの編年をふまえ、3期に分期している(邵望平1984)。ここでは基本的には3期案を採用し、廟底溝類型期を大汶口文化早期に比定した。時期が平行する遺跡には、野店遺跡1~3期、劉林遺跡晚期墓、大墩子遺跡早期墓、王因遺跡晚期墓があげられる。
- (9) 他の10基の墓から出土した彩陶は、図面・図版が報告書に掲載されていないため廟底溝類型系かどうか判断できなかった。
- (10) 渡辺芳郎は、劉林遺跡の詳細な墓の分析をおこなっている。本稿で使用した数値は、氏の論文から引用させていただいた。

## 引用文献

- 安 志敏 1959 「試論黃河流域新石器時代文化」『考古』1959-10  
——— 1979a 「略論三十年来我国的新石器時代考古」『考古』1979-5  
——— 1979b 「筆談建国三十年来的文物考古工作」『文物』1979-10  
——— 1981 「中国的新石器時代」『考古』1981-3  
華東文物工作隊 1954 「四年来華東区的文物工作及其重要的發現」『文物參考資料』1954-8  
——— 1955 「淮安県青蓮崗新石器時代遺址調查報告」『考古学報』1955-9  
夏 鼐 1977 「碳-14測定年代和中国史前考古学」『考古』1977-4

- 河南省文物研究所 1987 「長葛石固遺址發掘報告」『華夏考古』1987-1
- 嚴 文明 1965 「論廟底溝仰韶文化的分期」『考古學報』1965-2
- 1980 「論半坡類型和廟底溝類型」『考古與文物』1980-1
- 1989 「略論仰韶文化的起源和發展階段」『仰韶文化研究』文物出版社
- 黃河水庫考古隊華縣隊 1959 「陝西華縣柳子鎮考古發掘簡報」『考古』1959-2
- 高 広仁 1980 「試論大汶口文化的分期」『文物集刊』1
- 江蘇省文物工作隊 1962 「江蘇邳縣劉林新石器時代遺址第一次發掘」『考古學報』1962-1
- 吳 汝祚 1982 「論大汶口文化的類型與分期」『考古學報』1982-3
- 1987 「膠萊地區的大汶口—崑山文化一」『考古學文化論集』1
- 1990 「大汶口文化的墓葬」『考古學報』1990-1
- 山東省博物館 1972 「山東野店新石器時代墓葬遺址試掘簡報」『文物』1972-2
- 1978 「談談大汶口文化」『文物』1978-4
- ·山東省文物考古研究所 1985 「鄒縣野店」文物出版社
- 山東省文物管理處·濟南市博物館編 1974 「大汶口—新石器時代墓葬發掘報告一」文物出版社
- 邵 望平 1984 「新發現的大汶口文化」『新中國的考古發現和研究』文物出版社
- 石 興邦 1959 「黃河流域原始社會考古研究上的若干問題」『考古』1959-10
- 西安半坡博物館 1984 「陝西岐山王家咀遺址的調查與試掘」『史前研究』1984-3
- 西安博物館·陝西省考古研究所·臨潼縣博物館 1988 「姜寨—新石器時代遺址發掘報告一」文物出版社
- 陝西考古所涇水隊 1960 「陝西邠縣下孟村遺址發掘簡報」『考古』1960-1
- 陝西省社會科學院考古研究所涇水隊 1962 「陝西邠縣下孟村仰韶文化遺址統掘簡報」『考古』1962-6
- 蘇 秉琦 1965 「關於仰韶文化的若干問題」『考古學報』1965-1
- 張 光直 1980 『考古學よりみた中国古代』雄山閣出版
- 1989 「中國相互作用圈與文明的形成」『慶祝蘇秉琦考古五十五年論文集』文物出版社
- 張 居中 1986 「仰韶時代文化芻議」『論仰韶文化』中原文物1986年特刊
- 張 明川 1990 『中國彩陶圖譜』文物出版社
- 中國科學院考古研究所山西工作隊 1973 「山西芮城東庄村和西王村遺址的發掘」『考古學報』1973-1
- 中國科學院考古研究所編著 1959 『廟底溝與三里橋』科學出版社
- 1962 『新中國的考古收穫』文物出版社
- 中國科學院考古研究所洛陽發掘隊 1964 「伊河下游幾處新石器時代遺址的調查」『考古』1964-1
- 中國社會科學院考古研究所山東工作隊·濟寧地區文化局 1979 「山東兗州王因新石器時代遺址發掘簡報」『考古』1979-1
- 鄭 傑祥 1981 「試論大河村類型」『中國考古學會第三年次會論文集』文物出版社
- 鄭州市博物館 1979 「鄭州大河村遺址發掘報告」『考古學報』1979-3
- 南京博物院 1958 「江蘇淮安青蓮崗遺址古墓葬清理簡報」『考古通訊』1958-10
- 1964 「江蘇邳縣四戶鎮大墩子遺址探掘報告」『考古學報』1964-2
- 1965 「江蘇邳縣劉林新石器時代遺址第二次發掘」『考古學報』1965-2
- 1978 「長江下游新石器時代文化若干問題的探析」『文物』1978-4
- 1981 「江蘇邳縣大墩子遺址第二次發掘」『考古學集刊』1
- 1983 「江蘇海安青墩遺址」『考古學報』1983-2
- 武 津彦 1981 「略論河南境內發現的大汶口文化」『考古』1981-3
- 北京大學考古實習隊 1961 「洛陽王灣遺址發掘簡報」『考古』1961-4
- 楊 建芳 1962 「略論仰韶和馬家窯文化的分期」『考古學報』1962-1
- 橫田禎昭 1975 「仰韶文化的埋葬について」『考古學研究』21-3
- 1983 「トルコ石交易からみた中国新石器時代晩期の様相」『中国古代の東西交流』雄山閣

出版

- 量 博満 1981 「新石器時代研究の展開」『中国歴史学界の新動向』刀水書房  
渡辺芳郎 1987 「中国新石器時代タカラガイ考」『横山浩一先生退官記念論文集 I 生産と流通の考古学』  
——— 1989 「劉林遺跡墓制考」『史淵』第126輯

(国立歴史民俗博物館 考古研究部)

## Miaotikou-type Colored Earthenware of Dawenkou Culture

NISHITANI Masaru

This paper deals with Miaotikou-type colored earthenware discovered from remains belonging to the Dawenkou culture, and aims to clarify the contents of the cultural communication between the basin of the Wei He and the middle and lower basins of the Yellow River, by examining the spread of this type of earthenware to the Dawenkou culture in the Shangtong area.

Firstly, the earthenware was analyzed according to the manner in which it was excavated in each area and at each site. Then, it was pointed out that Miaotikou-type colored earthenware was used in daily life together with other pottery in the Yanshao culture in the middle and southern basins of the Yellow River and the basin of the Wei He. The custom of burying colored earthenware in graves does not seem to have existed. Secondly, in the early Dawenkou culture in the Shangtong area, Miaotikou-type colored earthenware is found in graves as burial goods. It is possible that the proper function of colored earthenware as food vessels changed into that of funerary pottery. Furthermore, it is possible that some shapes and patterns of Miaotikou-type colored earthenware of the Yanshao culture were selectively adopted into the early Dawenkou culture in the Shangtong area. Finally, an analysis of the tombs of Dadengzi and Liulin sites, suggests that the colored earthenware was only buried in the graves of rich people with many burial accessories; therefore, it is highly possible that the colored earthenware was treated as a symbol of authority in the group. In any case, the people of the early Dawenkou culture did actively adopt the colored earthenware. This is shown in the fact that they changed the usage of colored earthenware from food vessels to burial goods, and the fact that they preferred the finest and most complicated patterns for the grave-ditch-type colored earthenware.

The colored earthenware must have been brought to the Shangtong area by a commercial route. The grave-ditch-type colored earthenware in the early Dawenkou culture seems to have been brought through communication, mainly the trading of goods, without any accompanying transfer of people from the basin of the Wei He and the middle and central basins of the Yellow River.